様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１０１８

研究課題名（和文）柳原吉兵衛と朝鮮からの女子留学生―支援活動を中心に―

研究課題名（英文）Kichibei Yanagihara and Korean Female Students-Focusing on the Supporting Activities

研究代表者
太田　孝子（OHTA, Takako）

岐阜大学・留学生センター・教授

研究者番号：００２９３５８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：柳原吉兵衛（1858～1945）は、朝鮮の女学生・女教員に対する支援に努めたが、李王家御慶事の喜びを共に祝いたいという素朴な願いから始めた活動である。
周囲からは「吉兵衛の他意なき熱心がこれを大成なさしめた」と評され、被支援者からは深い愛情から発した行為と受け止められた。しかし、皇室や朝鮮王室に対する尊崇の念は、被支援者には柳原が願うほどの受け止め方はされず、戦後まで繋がる価値観とはならなかった。

研究成果の概要（英文）：Beginning from the 1920s until March 1945, K. Yanagihara provided many opportunities for Korean females to further their educational careers. He provided opportunities to study in Japan. Furthermore, he allowed opportunities for teachers to attend school observations in Japan for professional development.
Yanagihara had great respect for the Imperial household and was close friends with many of the imperial household officials. He thought that meeting with Japanese and Korean noble personages would be worthwhile for the Korean female students and teachers. As such, Yanagihara planned for the students and teachers to attend the enthronement ceremony of the Showa Emperor, meet the Yi dynasty Prince of Korea, and the Japanese governor-generals of Korea. Though he was a Christian, he still respected Japanese Imperialism and Korean nobility. However, his precept was not linger among the Korean females after World War II.

研究分野：教育史

キーワード：留学生支援　異文化理解　内鮮融和

１．研究開始当初の背景

本研究は、これまで科学研究費を獲得して実施してきた、①「日本植民地時代における朝鮮の高等女学校に関する実証的研究」、②「朝鮮からの女子内地留学生の研究」、③「異文化をつないだ日・米の支援者たち－朝鮮人女子留学生への支援の形態に着目して」の研究の一環であり、別の角度から調査する必要性を覚え企図したものである。

同上①で高等女学校の学校史の翻訳、高女卒業生に対するアンケート調査、インタビュー調査を実施することにより、②の日本(内地)への留学生の研究に至った。その過程で、朝鮮人女子留学生に対する支援者の存在に気づいたことにより③の研究を実施し、柳原吉兵衛という人物に注目するようになった。本研究では、朝鮮人女子学生・女子教員等を傑出した形で支援し続けた柳原吉兵衛に焦点を当てる。

柳原吉兵衛（1858～1945）は、大阪府堺市に創業した大和川染工所の経営によって得た資産のほとんどを朝鮮人に対する支援活動に費やした。その主なものは、1）朝鮮人個々人に対する支援、2）内鮮協和会を通しての各種支援、3)李王家御慶事記念会を通しての女子学生・女子教員に対する支援、の三つに大別できる。これまで、3)に焦点を当てて一連の研究を進めてきたが、その概要は以下の通りである。

柳原は、1920 年、李王世子垠と梨本宮方子の結婚を記念して「李王家御慶事記念会」を設立し、朝鮮の女子高等普通学校等の最優等生を表彰し、一部の卒業生を奈良女子高等師範学校等の高等教育機関に入学させ、奨学金を授与するだけでなく、卒業するまで細部にわたる支援・交流を続けた。卒業後も、柳原は卒業生等と書信を交わし続け、ほぼ毎年朝鮮に渡って卒業生との親睦会を開き、勤務校を訪問し支援している。御慶事記念会が表彰した女子学生は 1,048 人、奨学金授与を含む多様な支援を行った内地留学生は 80 余人と言われている。さらには、3 回にわたって女子教員に内地学事視察の機会を提供しており、その視察には柳原の思想が如実に反映されている。

上記のような多様な支援活動を展開した柳原を、朴宣美は「帝国のさまざまな価値を植民地人に積極的・組織的に伝播し、植えつけようとするコロニアル・ミッショナリーのような存在」（朴宣美『朝鮮女性の知の回遊－植民地文化支配と日本留学』、山川出版社、2005 年、p.83）だったと評し、樋口雄一はその活動を「朝鮮人としての精神的生命を奪い去る非道の行為」（樋口雄一『協和会－戦時下朝鮮人統制組織の研究』、社会評論社、1986 年、p.230）だったと断じている。

しかし、女子留学生・女子教員等が柳原に送った書簡（1,202 通、桃山学院大学史料室所蔵）を読む限り、上述のような評価で柳原の活動を片付けていいのかという疑問が残る。

本研究は、柳原の支援を受けた人々の受け止め方に焦点を当てながら、活動の全容を再調査することによって、柳原の評価が変わるのかという疑義から着手するに至った。

２．研究の目的

（1）3 度にわたって柳原が企画した「朝鮮人女子教員内地学事視察」の全容を解明し、柳原の意図、参加者の意見・反応、その後の教育現場への影響等を把握する。教員となった元留学生も、リーダーとして学事視察に参加しているが、その働き・柳原との交流の模様も調査する。

（2）卒業生・女子教員が柳原に送付した書簡を精読し、留学生・卒業生が柳原の支援をどのように受け止めていたのか、卒業後どのような交流が続いたのかを把握する。

（3）朝鮮人の指導・強化に関して柳原がどのような意見・意図を持っていたのかを柳原自身の文章により把握する。

（4）柳原の人脈を把握すると共に、支援活動に対する周囲の評価を探る。

（5）上記を踏まえ、柳原に対する従来の評価を再検討する。

３．研究の方法

（1）は柳原が 1928 年から内地経験のない朝鮮人女子教員（主に普通学校勤務、日本の小学校に相当）に内地学事視察の機会を与える支援を始めたものであり、『朝鮮女子教員内地視察記』（1929 年、30 年）が桃山学院大学史料室に保存されている。20 日間程日本各地の小学校、高等女学校、東京女子高等師範付属小学校、名所旧跡を視察・見学した諸行程、内容、感想等が記録されており、柳原の支援の目的・実態を把握することができる。視察団には帰朝後教員となった内地留学経験者が複数名参加しており、柳原と卒業生との交流状況も把握できると考える。なお、第３回学

事視察に関する記録は入手できていないが、文献を探し内容の把握に努める。

他方、朝鮮総督府主催の内地学事視察に関する記録（『女教員内地学事視察録』、1927 年刊）も同史料室に保存しされているため、柳原の企図した内地学事視察と比較する。

（2）に関しては、卒業生・女子教員等から送付された書簡 1,202 通が桃山学院大学史料室に学校別・人物別に分類され保存されている。かなりの量であり、判読しにくい文字・文章が多数見られるが、留学生・卒業生・女子教員等は柳原にどのような書簡を送っていたのか、柳原の支援をどのように受け止めていたのかという点を中心に精読し、内容を検討する。

（3）に関しては『社会事業研究』への寄稿記事（第 16 巻 9 号、第 19 巻 11 号、第 21 巻 12 号など）があり、「朝鮮子弟教育に関する卑見」（1924、36 年）には、柳原の教育観・女性観が如実に記されている。関連資料を収集・検討し、朴宣美前掲書等の分析と比較する。

また、『向上』No.1～27 は柳原が経営する染工所の労使協同団体「克己団」の機関紙であり、柳原の教育観・人生観（修養の必要性、節制、共済など）・朝鮮人に対する見解（朝鮮人労働者の雇用と接し方など）、朝鮮訪問記等が掲載されている（桃山学院大学史料室所蔵）。さらに、1920 年に「李王家御慶事記念会」を設立してからは、記念会の設立趣意書、朝鮮人女子学生の表彰の様子等、朝鮮人女子学生関連の記事も載っており、柳原の支援活動を知る上で貴重な資料である。精読し、朴前掲書と比較する。

『櫻槿の華』（No.1～8）は、それまで『向上』に載せられていた朝鮮人女子学生・女子教員関連の記事を独立させて発行した機関紙であり、柳原の支援活動を記した貴重な資料である（桃山学院大学史料室所蔵）。精読し、朴前掲書の分析と比較・検討する。

（4）の柳原に関する同時代人の評価は、『青霞翁柳原吉兵衛伝』（梅田安之『青霞翁柳原吉兵衛傳』1949 年刊の私家本を、柳原の曾孫柳原高志氏が 2013 年に編集・発行）、女子教員内地学事視察に同行した教員の文章等から把握する。また、柳原家の人々にインタビューし、柳原がどのような人物として伝えられているのかを聴取する。

（5）柳原吉兵衛に関する研究者等の意見・論文等を参考に、柳原の全体像の把握に努める。

4．研究成果

（1）柳原は「いずこの民族にしても女性は母となって次期の国民を育てるものである。・・・上級学校を志す者は指導の任に当たる教育家となるのだから、斯ういう女性教育こそ重要視すべきだ」（『青霞翁柳原吉兵衛傳』）という見解を持ち、女性の教育と女子教育者の育成に努めた。柳原が企図した「女子教員内地学事視察」は、その一環であり、概要・特記事項は以下の通りである。

①第一回「大礼奉拝朝鮮女子教員内地視察」（1928 年 11 月 19 日～12 月 7 日）

・視察の目的は、「未曾有の御大典に女子教員を招待する」こと。

・参加者は 13 道から 20 名選出され、うち 5 名が元留学生で女子高等普通学校勤務、他は普通学校、女子普通学校の訓導である。

・『大礼奉拝朝鮮女子教員内地視察記』（全 69 ページ、以下『視察記』）は団員（参加教員）が順番に、旅程、視察箇所とその内容・感想、会った人々（項目名は「特に好意を寄せられた方」）などを詳細に記述したものである。

・釜山を経由して下関、厳島、大阪、京都、奈良、東京で小学校参観、奈良女高師で留学生たちと懇談した他、新聞社・三越・名所旧跡(神社・公園等)を見学した。

・李王家御慶事記念会による盛大な歓迎会に出席（大阪府知事、堺市長、堺市教育会長、記念会会員等会衆は 400 余人）。余興では合唱、舞踏など 20 種目以上が披露された。

・11 月 26 日「鹵簿奉拝」のため京都御苑に集合。『視察記』は入場券の写し、写真を含め 4 頁を割いて、感動を記録している。

・12 月 1 日大礼後最後の儀式に参列、続いて李王邸を訪問、李王・李王妃に拝謁し感極まる。前朝鮮総督斉藤実宅も訪問した。

・12 月 4 日には即位式の行われた紫宸殿や大嘗宮を参拝。

・柳原は大阪、奈良、京都、東京に同行し、団員と共に「国家最高の儀式」に参加した。

・『視察記』の前半部分には、学校で教えられたような美辞麗句・国家観が記されているが、後半部分には「漫画女教員視察団」が載っており、異文化の中での失態や疑問、体験談が面白おかしく描かれている。

②第 2 回「李王家御慶事十周年記念朝鮮女子教員内地視察」（1930 年 4 月 18 日～5 月 7 日）

・視察の目的は「李王家御成婚十周年記念奉祝と先般竣工された御新邸のお喜びを申し上ぐる」ため。

・参加者は 18 名(出発間際に 2 名不参加、京城府、11 道から選出された)。

・厳島、大阪、奈良、東京、京都と視察ルートは前回とほぼ同じだが、a）歌舞伎を観劇したこと、b）李王家新邸並びに関屋貞三郎宮内次官（前朝鮮総督府学務部長）宅を訪

問したこと、c）地下鉄、地下売店、高架鉄道、デパート見学等に関する素朴な感想が多数綴られていること、d）観兵式拝観が雨で中止になったこと、e）帝国議会（衆議院・貴族院）を参観したこと、f）教育現場の視察や女子教員との懇談が増えたことが主な特徴であり、前回との相違点ともなっている。

・教育現場の視察では、生産・労働教育、礼儀作法、教授法に深い関心を示したが、「豊富な設備は朝鮮の学校に直ちに其の侭採用することはできない」ことを実感した。

・李王家や皇室関係者との面談等に関する記述では、前視察記とほぼ同じ文章が綴られているが、団員たちの文章が生き生きするのは、日本文化に接した時の驚きや感嘆であり、教員として馴染みのある場面での感想である。

・柳原は名誉団長として、東京に同行した。

③第三回「朝鮮女子教員内地視察」（1934年4月20日～5月7日）

・視察の目的は「日本の権威を確認させ内鮮融和を進めるとの狙い」（李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」より）、並びに「奈良女高師開校 25 周年記念祝賀会に参列」するため。

・参加者は18名（13道から、女学校教員4名、普通学校訓導14名が選出された。幹事の金東玉と女学校教員の計5名は奈良女高師の卒業生、最優等表彰を受けた者が7名）。

・コースは前2回とほぼ同じだが、奈良女高師記念祝賀会に出席するため、京都、宇治山田、東京、奈良、大阪、厳島と逆回りで実施された。

・4月28日の李王家御慶事記念日に、柳原は金東玉（今視察の幹事で 1930 年に皇太后に献上した人形衣服の謹製者）、崔貴蘭(今視察団員で 1932 年献上の朝鮮金剛山図刺繍の謹製者)を連れて大宮御所を伺候、入江皇后宮大夫に面接した。

・朝鮮総督を歴任した斉藤実首相の接待により一同官邸を訪問、接待を受けた。

・李王家邸を伺候、両殿下に拝謁し御成婚14回目の祝辞を述べた。

・4月29日は天長節恒例の観兵式を倍観。

・5月1日は奈良女高師開校25周年に参列後、青霞会館で歓迎会を開催(3 日)、翌日は大阪の名所・教育施設等を見学後、大阪府知事別館で内鮮協和会主催の歓迎会に招待された。

・記述には「御優待、御歓待、御歓迎」等の文字が多出する。

・「吾等を守る兵隊さん、教育の完成は立派な兵隊に仕立て上げること」など、日中戦争へと進んでいく時代の潮流を感じる記述が散見される。

・教員になった元留学生との再会を喜んだ柳原は、団長に「今晩一晩だけ娘たちを私に預からしてください。・・・みんなの好きな美味しい沢庵漬を昨年の秋から沢山こしらえて待っている・・・」と依頼している。

④総督府主催の内地学事視察との相違点

上述のように、李王家御慶事記念会主催による3度の内地視察の特徴は、1）昭和天皇即位式関連諸行事の拝観、2）李王家並びに総督府関係者宅の訪問、3）皇室や朝鮮王室の関係者等に朝鮮人女子教員を引き合わせていることであり、総督府主催の視察とは著しく異なる点となっている。これは柳原が関与したために実現したことであり、このような謁見の場の設定を何よりも柳原自身が望んだのである。柳原は方々に働きかけ、実現に向けて時間と労力を注いでいる。

⑤内地学事視察の教育界への影響

柳原は、第一回参加の訓導崔承愛が勤労教育を実施して予想外の実績を上げるなど、教育界に及ぼした効果が多大であったことに励まされて第二回の視察を企図したと記している。「ただ家の中で座食していることが一つの誇りであるかのように思っていた朝鮮婦人に勤労教育を実施した結果、泥田で働くようになり夫や子どもにまで影響を及ぼし、学校では児童の勤労の一部が正課に加えられるようになった」ことにより、崔承愛は教育界から注目を集めた。

それを喜び、柳原は 1930 年夏に崔を大阪に招待し、社会事業（博愛社など）、農事の現場（農事試験場、葡萄組合農園など）を見学させている（『青霞翁柳原吉兵衛傳』）。

⑥皇室に敬意を持つことになった機縁

1）大阪で開催された第5回内国勧業博覧会にカーキ色軍服地を大和川染工所の製品として出品し受賞した。京都滞在中の天皇は国産軍服のカーキ染色が完成することを日頃から望んでいたため、受賞した品を京都御所に差し出して天覧に供するよう申し付けた。柳原はじめ染工所の一同は驚喜し、この予期しない栄光は非常な感激となり、皇室をこれまで以上に尊敬する契機となった。

2）大阪城に駐輦していた天皇に実業方面から種々の生産品の天覧があった中、特に国産カーキ色の軍服地に目を止められ、「献上品御嘉納の上、お買上げの御命に浴するを得・・・大正5年にはシャム国軍服地の染色加工を特約」することとなった。

3）1916 年には、柳原が関与していた堺加工セルロイド株式会社（染工所の合名会社、1921 年に閉鎖）が制作したセルロイド人形（大阪府知事が「やまと人形」と命名）が宮内省のお買い上げの栄を賜うことになる等、皇室からの評価が感激・喜びとなり、1920年の「李王家御慶事記念会」結成へと繋がった。さらには、留学生支援に対し好意的な御言葉を賜るなど、立て続けに直接皇室との関わりを持ったことが、ますます尊崇の念を強くする機縁となった。

⑦まとめ－支援活動に対する周囲の評価を中心に

a)いずれの支援活動も「朝鮮人の友になりたい」という柳原の素朴な願いが発端であり、相互の交流に喜びを見出していたという評価がほとんどである。支援を受けた側からは、深い愛情から発した行為と捉えた評価が多数記されている。

しかし、「未だ内地見學の経験なき朝鮮女子教育家を招待し、御大典の鹵簿や御盛儀の御跡、大禮後の観兵式などを拝観し、皇室と国民の父子間関係及び進みゆく内地の文化を詳さに観察し、體験して貰ふ事は直接教育の任にある皆様にとり、思想界の現状と内鮮関係の複雑し行く今日の場合に鑑み、誠に意義深い事であらう」（第一回学事視察の目的）という言葉に、内鮮融和を推進した柳原の真意が窺える。

b)女子留学生や女子教員の感想・書簡では、皇室・李王家との謁見等には違和感を抱いておらず、光栄に思うというレベルで捉えられており、拒否や反発などマイナスの評価は見られない。皇室や朝鮮王室に対する柳原の姿勢に関しては、このような方々と親しいことに誇りを感じているという記述が見られる。しかし、前述のとおり、李王夫妻に謁見した時の女子教員の感想が、二度ともほぼ同じ文章であり、驚きを禁じえなかった。皇室や日本精神等に関する感想は、学校で教え込まれた語彙の範囲を超えられないことを痛感した。同一の語彙を多用している点に、柳原が願うほどの受け止め方をしていないことが窺える。

c）柳原は計 8 回訪朝し、多くの朝鮮人女子学生や女子教員等と交流を持った。しかし、朝鮮の文化に対する言及、関心を窺わせる文章は見当たらない。皇室に献上するだけの刺繍や絵画の腕前を評価し、優秀な女学生と記しながら、それを生み出した朝鮮の文化に対する言及を現時点では発掘できていない。「文化の発達した内地」を良しとし、内地のようになることを願った点に、柳原の異文化への眼差しの欠如が窺える。もし、朝鮮を内地とは違った文化を持つ国と見ることができたならば、内鮮融和政策や植民地政策をも相対化し、疑義を持つ一助となったのではないだろうか。

d）柳原は 1945 年 3 月 2 日に 88 歳の生涯を閉じた。2 月 15 日、書類を整理するために土蔵に入り、階段を上ろうとした曲がり角で躓いて倒れた時の後頭部の打撲が致命傷となった。前年 10 月には李王夫妻の銀婚の祝いに上京し、傷を負う前日には伊勢大廟に参拝して梨本宮と懇談するなど、最後まで皇室との交流を持ち続けた。もし、柳原が元気で戦後を迎えていたら、柳原は天皇のいわゆる人間宣言や自身の支援活動をどのように捉え、評価したであろうか。少なくとも、留学生や女子教員に教え、伝えようとした柳原の信念は、戦後にまで彼女等の中に残る価値観とならなかったことは明らかである。

（2）梅田安之が執筆した『青霞翁柳原吉兵衛傳』（全 3 巻、1948 年刊、私家本）はこれまで入手が不可能だったが、曾孫の柳原高志氏よって 2013 年に復刻された本書を入手し、朝鮮人女子留学生・女子教員等に対する支援を含む柳原の生涯を把握することができた。また、柳原家は代々キリスト教徒として吉兵衛の信仰を受け継いでおり、今でも話題に上る人物であるなど、吉兵衛の人となりや一族への影響力を聴取することができた。

(3)残存する女子留学生・卒業生・女子教員等からの書簡は 1,202 通に及び、57 名が送付している。一人で 105 通送った人もいるが、内容は①諸々の支援やお世話になったことに対するお礼、②時候の挨拶・年賀状、③諸報告（結婚や就職、仕事内容、家族の動向など）、④依頼（内地への留学の世話、絵や物品の購入、渡鮮の要請など）が主なものである。柳原は「入学願書の入手・送付以来」「妹の留学依頼」「絵の購入依頼（朝鮮初の女流西洋画家羅惠錫）」等々に対し、一つ一つ丁寧に対応している。

ほとんどの女子留学生・女子教員は柳原の支援を喜んで受け入れており、柳原との交流を通してキリスト教に入信した留学生もいる。しかし、「失礼ながら私共をあなたの事業の材料にするようなことはよしてください。・・・今後御交際を堅くお断りいたします」という手紙が一通残されている（東京女子高等師範学校朝鮮人学生 5 名による 1924 年 12 月 13 日付柳原宛の手紙）。

（4）既述のように、樋口雄一は著書の中で柳原吉兵衛の活動を「朝鮮人としての精神的生命を奪い去る非道の行為」と断じているが、樋口の著書を用いて「資料 2 柳原吉兵衛文献」（《大阪教区宣教協議会学びのための資料》所収、1997 年）を記述した聖公会大阪教区宣教協議会実行委員会及び道委員長山本眞に対し、柳原家が同年 11 月に提出した意見書を入手し、意見書執筆の経緯、柳原家の疑念、吉兵衛に対する思い等を把握した。

内容は、1)一市井人柳原が重要人物（「日本における朝鮮人伝道者」）であるかのように取り上げられている、2)樋口の評価は柳原家に特別な悲しみと困惑を与えるものであったが、樋口の評価のみが正解であるかのように取り上げている、と実行委員会の柳原の取り上げ方に対する疑念を述べ、柳原の蒔いた種は今も生きており、当時支援を受けた人々から感謝の書状が届き、交流もある等、実際の手紙文を載せ、孫たちの柳原への思い出・感想も加えながら記したものである。「吉兵衛には時流に乗った点もあったかもしれ

ないし、誤りのない人物でもない。良い面を取り上げてほしいといっているのでもない」という立場から書いた意見書であり、抗議文ではない。

（5）これまで関屋貞三郎（朝鮮総督府学務部長、後に宮内次官、朝鮮人女子学生を支援した関屋依子の夫）と柳原吉兵衛との関係を把握することができなかったが、柳原吉兵衛が関谷に宛てた文書（1928 年 8 月 16 日付け、第 1 回朝鮮女子教員内地学事視察の際、京都御所拝観が許可された旨の報告とお願い）を発掘でき、両者の関係が初めて明らかになった。第 2 回「李王家御慶事十周年記念朝鮮女子教員内地視察」（1930 年）では、視察団員と共に関屋宮内次官宅を訪問している。また、関屋貞三郎の文章「キリスト教と新日本」（『基督教教養講座』所収、春光社、1948 年刊）により、初めて関屋貞三郎とキリスト教の関係を確認することができた。

（6）第三回視察に関しては後日報告書が刊行されたようだが、国内の図書館には保存されておらず、入手できていない。本稿は『櫻槿の華』第 2 号、第 3 号、『青霞翁柳原吉兵衛傳』を参考にしたが、『文教の朝鮮』に第三回団長北川清之助の文章が掲載されており、視察の全容がほぼ判明した。北川の文章は桃山学院大学史料室にも届けたが、同史料室を中心に、柳原に関する研究者・調査者が情報交換する機会を与えられており、2016 年 12 月 2 日には堺市文化観光局文化財課中村氏の企画により柳原が創設した大和川染工所をはじめとする「堺市内柳原吉兵衛関係旧跡見学会」を実施した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

１．太田孝子「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅳ）」『岐阜大学留学生センター紀要』2013 年号、3-16 ページ、2014 年 6 月

2.太田孝子「若き日の内地留学：新女性たちの知の獲得」『岐阜大学留学生センター紀要』2013 年号、87-89 ページ、2014 年 6 月

3.太田孝子「植民地下朝鮮における梨花女子高等学校―「光州学生運動」を中心に」『岐阜大学留学生センター紀要』2014 年号、3-20 ページ、2015 年 7 月

4.太田孝子「柳原吉兵衛の支援活動―朝鮮人女子教員内地学事視察を中心に」『岐阜大学留学生センター紀要』2015 年号、1-18 ページ、2016 年 7 月

〔学会発表〕（計　1　件）

1.太田孝子「柳原吉兵衛の日朝交流活動―朝鮮人女子教員内地視察を中心に―」日本聖公会歴史研究会第 25 回歴史研究者の集い、2015 年 5 月 29 日、於：立教大学

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
太田　孝子（ OHTA、Takako ）
岐阜大学・留学生センター・教授
研究者番号：00293580

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）